海外留学必携！

日本を知るための31冊

東京外国語大学に入学したのですから、みなさんのなかにも海外留学を考えているひとはたくさんいるでしょう。行く先で話されている言葉をあらかじめ学び、その文化や歴史の予備知識を準備する――これはとても結構なことなのですが、それでいざ飛び出してみたとき、思いのほか困惑させられる事態に突き当たることがあります。その最たる局面は、日本語でこれまで教育を受けてきた君たちがこの異なった文化的言語的環境のなかで「では、きみ自身を語ってみたまえ」と促されたときです。自分たちについてよく知らないということに愕然とするならまだいいほうで、そのときのバツの悪い経験から、ひどく卑屈な「国際人」になったり、あるいは逆に情動的で排他的な俄かナショナリストになったりするケースもよく見かけます。それを防止する、というのは大げさかもしれませんが、なにか助けになる本を、できるかぎりスーツケースに収まりやすい新書や文庫などのなかから、海外留学必携書として選んでみました。

（編集部）

まずなによりも、日本の「伝統文化」について尋ねられることが意外に多いでしょう。代表的な伝統文化として、浮世絵と歌舞伎の本を二冊あげます。

●**大久保純一『カラー版　浮世絵』**岩波新書

●**古井戸秀夫『歌舞伎入門』**岩波ジュニア新書

ところが、「伝統社会」の説明となると、なかなか簡単にはいきません。高校で日本史をもっとちゃんとやっておけばよかった、と思っても遅い。それに、何年に何があったなどという説明は求められていません。そのために、あらかじめぜひ読んでおきたい歴史書としては、つぎの六冊があります。なお、＊がついたものは、本誌「外大生にすすめる本」（吉田ゆり子執筆）に簡単な解説があります。

●**網野善彦『無縁・公界・楽―日本中世の自由と平和』**平凡社ライブラリー

●**勝俣鎮夫『一揆』**岩波新書　＊

●**尾藤正英『江戸時代とは何か―日本史上の近世と近代』**岩波現代文庫

●**山口啓二『鎖国と開国』**岩波現代文庫　＊

●**大口勇次郎『女性のいる近世』**勁草書房

●**安丸良夫『神々の明治維新―神仏分離と廃仏毀釈』**岩波新書

伝統文化・伝統社会といっても、それがつねに変わらない本質のように横たわっているのではありません。歴史はもっとダイナミックな闘争と対話の創造的な過程です。近代日本が出現するときに、近代化とともに消えていく世界を捉えた心に染み入る本として、たとえばつぎの四冊があります。

●**安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』**平凡社ライブラリー　＊

●**渡辺京二『逝きし世の面影』**平凡社ライブラリー

●**柳田國男『遠野物語』**岩波文庫

●**宮本常一『忘れられた日本人』**岩波文庫

近代日本は同時に排除や抑圧の歴史でもありました。単調で単色のイメージではなく、多元的な世界を思い描くことができるようにするためには、「差別の歴史」とでもいう視角から、つぎの六冊を薦めます。

●**盛田嘉徳ほか『ある被差別部落の歴史―和泉国南王子村』**岩波新書

●**知里幸恵『アイヌ神謡集』**岩波文庫

●**上野英信『地の底の笑い話』**岩波新書

●**金時鐘『「在日」のはざまで』**平凡社ライブラリー

●**石牟礼道子『苦海浄土』**講談社文庫

●**白土三平『カムイ伝』**小学館文庫（古本）、またはビックコミックの全集版

また、留学先では、かつてのアジア・太平洋戦争について、どういう認識をもち、加害と被害の記憶に対して個人としての見識を問われることも少なからずあるでしょう。そのためには、「戦争の記憶」に関わるものとしては、ぜひつぎの五冊を読んでおきたいものです。

●**大江健三郎『ヒロシマ・ノート』**岩波新書

●**ノーマ・フィールド『天皇の逝く国で』**大島かおり訳、みすず書房

●**野田正彰『戦争と罪責』**岩波書店

●**高杉一郎『極光のかげに―シベリア俘虜記』**岩波文庫

●**謝花直美『証言 沖縄「集団自決」―慶良間諸島で何が起きたか』**岩波新書

それから、「日本の今」をより多面的に捉えるための作品として、たとえばつぎの八冊は役に立ちます。西田の『善の研究』はたしかに手ごわい哲学書なんですが、無という問題について強い関心を持つ日本通に出会ったときに、この一冊の一章だけでもじっくり読んだことがあれば、対話の足がかりができるはずです。鎌田の『自動車絶望工場』は、トヨタの車の性能でも論じるときに、トヨティズムとは何かについて絶対に知っておかないといけない傑作です。鶴見の本はかつての不良少年の軌跡です。留学なんて純潔な気分で国家を背負ったりしないで、多様性の海のなかに、不純な存在として解けていくのが一番です。

●**丸山眞男『日本の思想』**岩波新書

●**西田幾多郎『善の研究』**岩波文庫

●**鎌田慧『自動車絶望工場―ある季節工の日記』**講談社文庫

●**片岡義男『日本語の外へ』**角川文庫

●**村井吉敬『エビと日本人』**岩波新書

●**鶴見俊輔『期待と回想―語り下ろし伝』**朝日文庫

●**村上春樹『アンダーグラウンド』**講談社文庫

●**『日本国憲法』**小学館ほか。

じゃ、ボン・ボヤージュ。

2009年貸出ランキング

2009年の図書館貸出ランキング（日本語編／日本語以外の言語編）をご紹介します。1位に輝いたのは、昨年と同様、ベネディクト･アンダーソンの『想像の共同体』です（同点同位が多いため、日本語編は上位5位、日本語以外の言語編は上位3位まで）。

ランクインした本は、よく貸出中でなかなか読むことができませんので、インターネットから、あるいは図書館2階カウンターにて予約することをおすすめします。予約方法については、お気軽に図書館員にお問い合わせください。

【日本語編】

Rank	Title/Author
1	**想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行** ベネディクト・アンダーソン著　白石さや，白石隆 訳
2	**トルコ近現代史―イスラム国家から国民国家へ**　新井政美 著
3	**日本語音声学入門**　斎藤純男 著
4	**カラマーゾフの兄弟**　ドストエフスキー著　亀山郁夫 訳（光文社古典新訳文庫）
	クルド・国なき民族のいま　勝又郁子 著
	ロシア（ヒストリカル・ガイド）　和田春樹 著
	語用論への招待　今井邦彦 著
	動詞意味論―言語と認知の接点　影山太郎 著
5	**アジア地域秩序とASEANの挑戦 ―「東アジア共同体」をめざして**　黒柳米司 編著
	アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現　工藤真由美 著
	言語学　風間喜代三 ほか著
	小学校での英語教育は必要ない！　大津由紀雄 編著

【日本語以外の言語編】

Rank	Title/Author　☆本のテーマ（書かれている言語）
1	한국어 어휘와 문법의 상관구조　노마 히데키（野間秀樹）지음 ☆ 朝鮮語の文法・語彙について（朝鮮語）
2	*Meaning in interaction : an introduction to pragmatics*　Jenny Thomas ☆ 語用論・言語行為（英語）
	Nuevo ele : curso de español para extranjeros : inicial 2, libro del alumno Virgilio Borobio ; [con la colaboración de Ramón Palencia] ☆ スペイン語のテキストブック（スペイン語）
3	*Niveau intermédiaire*　Ross Steele　☆ フランス語のテキストブック（フランス語）
	Politeness : some universals in language usage Penelope Brown and Stephen C. Levinson　☆ 社会言語学・語用論など（英語）
	The Translation studies reader edited by Lawrence Venuti ; advisory editor Mona Baker　☆ 翻訳について（英語）
	표준 국어문법론　남기심 , 고영근 지음　☆ 標準国語文法論（朝鮮語）

※興味のある資料が、図書館のどこにあるのか、配置場所を確認する場合は、OPAC（http://www-lib.tufs.ac.jp/opac/）で検索してください。

2009年（平成21）度 附属図書館課外活動記録

図書館では、基本的な通常業務のほかに、図書館の利用促進や読書振興のため、蔵書の企画展示、講演会等を企画し開催しています。昨年度の「課外」活動の一端をご紹介します。

2009年

4月1日～4月30日
●展示会「世界の絵本めぐり―これから外国語を学ぶ1年生へ」
図書館で所蔵している世界各地の絵本11点を展示（図書館2階ギャラリー）。

5月15日～6月15日
●展示会「Q. WHO AM I ?」
本人当てクイズ形式で童話『星の王子さま』の作者であるサン・テグジュペリ（一九〇〇-一九四四）に関する写真と蔵書を展示（図書館2階ギャラリー）。

7月1日～8月11日
●展示会「装本」
本のデザイン―「装」「ブックデザイン」をテーマに、日本で活躍した人たち、そして今、活躍している人たちの作品を、主に日本文学の棚から紹介（図書館2階ギャラリー）。

10月19日
●附属図書館講演会〈読書への誘い〉
第1回　沓掛良彦先生「語学と文学の間―私の読書遍歴」
ご専門の西洋古典文学・比較文学のみならず、比類ない学殖の広さを有する本学名誉教授の沓掛良彦先生が、ご自身の研究生活を振り返りつつ、読書体験について講演。

11月18日～12月18日
●平成21年度附属図書館展示会「Masson 19世紀バルーチスタン・アフガニスタン紀行」
現在もなお、第一級の史料とうたわれるアメリカ人旅行家「チャールズ・マッソン」の旅行記に残されたスケッチをたどり、19世紀のバルーチスタン、アフガニスタン世界を紹介（図書館2階ギャラリー）。

12月7日
●平成21年度附属図書館講演会
堀江敏幸先生「散文について―読むことと書くこと」
芥川賞作家で早稲田大学教授の堀江敏幸先生が、散文とは何かについて、二〇〇九年九月の巨人・ヤクルト戦で起こった出来事や、中谷宇吉郎の随筆「鼠の湯治」などを例に挙げて講演。

2010年

2月1日
●附属図書館講演会〈読書への誘い〉
第2回　永井進先生「環境と経済」
本学OBであられる法政大学経済学部教授の永井進先生が、一九六〇年代後半から現在に至る環境問題について、その経済的背景も含めて幅広く簡明に講演。

墓標としての文庫

「大塚文庫」の創設に際して

大川真由子

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授で、前所長の大塚和夫先生が二〇〇九年四月、五十九歳の若さで急逝された。日本を代表する社会人類学者、中東民族誌家である大塚先生は、これまでエジプトやスーダンをおもなフィールドに、「イスラームの人類学」という領域を開拓・確立された。読書家としても名高かった先生の蔵書を収めた「大塚文庫」が二〇一〇年度、研究所一階文献資料室内に創設される予定である。

研究者ならだれしもその蔵書の保管に頭を悩ますだろう。突然に主のいなくなった大塚研究室とご自宅には一万五〇〇〇冊ほどの書籍が残された。大塚先生が亡くなられた後、自宅書斎を拝見した教え子のわたしたちはまずその膨大なご蔵書の量と幅広いご関心に圧倒された。多くの書籍には裏表紙の内側に、アルファベットや漢字の署名とともに購入日が記されており、先生がいつ頃その本を読まれていたのかがおおよそわかる。たとえば、一九六〇年代後半に高校時代を過ごした先生はやはりというべきか、マルクスを読まれていたし、大学時代から二十代前半にかけては、サルトルの実存主義やフッサール現象学などの本も読み込まれていた。自宅に置かれた数十の本棚に、テーマごと分野ごとに理路整然と並べられた本を目前にしたわたしたちは、これを散逸させてしまうのはあまりにも惜しいと切に思った。先生が生前どのような関心をもたれ、どのような文献を読まれていたのか。この蔵書すべてが大塚和夫というひとりの研究者の人生を表しているといってよいだろう。したがって、蔵書の「文庫」化にあたり、先生ご自身が並べられていた書架をできるだけそのまま再現したいという想いがあった。

蔵書の整理にあたっては、大塚先生の前任校である東京都立大学（現首都大学東京）時代に教えを受けた者たちが中心となって作業を進めた。一日約一〇〇〇冊ペースで書誌情報を入力し、二週間をかけて文献リストを作成した。そこから自宅保管分や定期刊行物を除き、最終的に約一万冊が大塚文庫に収められることになる。驚いたことに、これだけの蔵書数でありながら二重買いの本がまったくといってよいほどなかった。教え子であるわたしたちは、蔵書のページを開いて先生の書き込みを発見しては、若かりし頃の先生に想いをはせたり、先生との想い出話に花を咲かせたりしながら作業を進めた。

文庫に所収される文献は、社会・文化人類学一般や中東、イスラーム関係が中心で、とくにエジプトやスーダンの民族誌や地域研究書が充実している。日本語と英語文献が中心だが、一部アラビア語、フランス語文献もある。残念ながら収められるのは書籍のみで、資料的価値の高い先生のフィールドノートや、先生が関心をもって集めていた論文抜刷集などは含まれていない（ただし、『ムスリム新聞』のように一般に閲覧が難しい資料はいくつか所収されている）。こうした先生の専門と関係した学術書のほか、思想や文学、政治関係の本が多いことも大塚文庫の特徴のひとつであろう。生前、大塚先生が人類学を通じて少しでも世界の相互理解が進むようにという想いを語られていたのが思い出される。

一般の図書館のようにテーマごとの分類はせず、あえて大塚先生独自の区分で並べた順番のままに、つまりプライベートの書架を再現したのが「大塚文庫」である。ご遺族からは、「遺言により墓を設けなかったこともあり、文庫も墓標のひとつと考え立ち寄ってほしい」というお言葉を頂いている。若い研究者や学生にとっては、亡くなられる直前まで第一線で活躍されていた社会人類学者、中東イスラーム研究者のご蔵書に触れるまたとない機会である。是非とも有効利用していただきたい。

（おおかわ・まゆこ　上智大学アジア文化研究所客員所員）

特別寄稿

東京外国語大学出版会へのメッセージ

真にアゴラとしての出版会に

谷川道子

この春に本学を退官された谷川道子先生は、本学出版会設立準備会の責任者として、また本学附属図書館長として、出版会の設立にご尽力されました。文字通り“わが出版会の母”である谷川先生から、出版会にメッセージを寄せていただきました。（編集部）

こういう厳しい出版状況の中で本気で「東京外国語大学出版会」を設立するのかと、いろんな方に危惧されながら二〇〇八年秋に船出した出版会だったが、すでに一年半にして六点を刊行!! しかもPieria Books（一般向け教養叢書）二点のほか、文学評論、日本語教育の指導書、通訳の教科書、アジア・アフリカ言語文化研究所（ＡＡ研）から世界各地の息吹を伝える新雑誌の発行と、本学らしい多彩な布陣で、順風満帆とまでは言わないまでも、まずは幸先のよいすべりだし。立ち上げに携わった者として、そしていま定年で本学を去りゆく身として、嬉しく頼もしく、その行き先を楽しみに見守っているところだ。

特色はふたつあろう。ひとつは、大学の学内組織として、エディターシップをもった出版会という新たな試みに挑戦し、企画・編集機能を十全に発揮した丁寧な本づくりによって、ゆっくり、じっくり息長く、本学の豊かな知的資源とその魅力を、多くの人々に伝える選りすぐりの企画を出版・提供していこうという姿勢。

ふたつ目は、図書館との連携・共生である。本というのは言うまでもなく、書き手の思いと書かれる対象と読み手の思いが一冊にぎゅーっと凝縮された宝物で、それを形にするのが出版会、図書館はその成果物の宝庫だ。そもそもが附属図書館長兼学長特別補佐のもとに学術公開推進室が設置され、出版会設立に関する調査・検討を具体的かつ集中的に行ってきて、出版会のための部屋もとりあえずは図書館内に設置された。そしてこの春に新ホールの「アゴラ・グローバル」が完成すると、めでたくそこに移転する運びとなる。

アゴラとは、古代ギリシア都市国家で公共の建築物や柱廊に囲まれた広場・市場のこと。市民が政治や哲学などを論じて閑暇を過ごし、自治を理想としたポリス的生活の中心だったという。だから本学の出版会は「アカデメイア＋パブリッシング＋ライブラリー」の三位一体の場であり（本学にしてはちょっと西欧志向すぎる言い方だがご寛恕を!!）、自由で自在な知の発信と受信が行き交う場なのだ。いまではそこに電子媒体の情報も含まれる。

本誌「ピエリア」も出版会と附属図書館の共同企画・編集による小冊子で、「外大生にすすめる本」のほか、エッセイ、図書館・出版会の紹介など、「本」にまつわる企画が盛りだくさん。さらには出版会として本学の学生を対象とした編集実務研修まで実施されているし、図書館と出版会の共催の講演会やトーク・イヴェントもさまざまに開催され、今後も多彩な催しが企画されているという。この出版会は知や文化をパフォーマティヴに立ち上げつないでいく他者への多様な媒介者の役割も十分に果たしているのだ。活用しない手はない。知的・文化的な公共圏（パブリシティ）がどのくらい成立しているかが、その共同体の成熟度のバロメーターでもある。

これからは「アゴラ・グローバル」とも連携して、読書会、朗読会、上演会、語劇、オープンアカデミー……など、あるいは在校生、卒業生、教職員、地域社会、世界的なネットワークにも開かれ、真にアゴラとしての「大学＋出版会＋図書館」の空間が、リアルあるいはヴァーチャルに、さらに広がっていくことだろう。ますます楽しみである。

（たにがわ・みちこ　前本学教授　ドイツ文学者）

社会と学問とのあいだに立って

わたしたちの大学出版会がめざすもの

岩崎 稔

東京外国語大学出版会は、二〇〇八年の一〇月に発足したばかりの新進の、というと聞こえはいいのですが、まだまだヒヨッ子の大学出版会です。世間では出版不況が取りざたされ、とくに人文関係の書籍の先細りが真剣にささやかれているなかでの船出ですから、なんと無謀なことを始めたものかと、面と向かって言われたこともありました。しかし、この危機の深度を自分たちの実感として理解するためにも、この挑戦は意義あるものだと考えています。

東京外国語大学出版会は、この大学のなかから生まれてきたさまざまな知的成果を世の中に発信していくという課題を担っています。でも、大学のなかでそれぞれの教員がしていることをそのままドサリと投げ出して、それで世間に通るはずもありません。研究している本人は「学問的価値がある」「他に誰もやっていない」と主張したとしても、そのことが本当に世界のなかで意義があるのか、たんなる学会のルーティンや自己満足ではないのかどうかを証明するのは、なかなか難しいからです。大学出版会は最初から、大学と社会とのあいだに立って、読者である公衆の眼をもって、自分たち大学人の仕事を点検しようと思っています。だから、大学出版会は、大学の一制度であっても、大学の外の感性をそこにシビアに持ち込もうとつねに工夫し苦心しているのです。

いわゆる「学術書」と称して、出版助成つきの高価な本として印刷され、実際にはせいぜい大学図書館に入るだけの出版物があります。たしかに、そのなかのいくつかが本当に「学術的」に稀な資料であったり、後世に残すべきものであったりすることは否定しませんが、あえて言うと、このような著作は実はわたしたちが生きている世界のなかの読書空間をさして豊かにはしてくれません。むしろ、大学出版会として目指しているのは、そうした現在の読者を

通過しない出版事業ではなく、むしろ中間的なとでもいうべき領域、社会と学問とのあいだの媒介的な領域での出版活動です。なによりも読者公衆という存在のなかに、ある反響を作り出すことができるような本を、大学の知を素材にして作っていきたいと思っています。もちろん、なんでも読者の話題になればいいということではありません。それに読者という存在がもつ判定力はそんなに甘いものではないのです。この不確かだけれど、まぎれもなく存在している読み手という基準を意識しながら、つねに読み応えのある本を作っていきたいというのが、始まったばかりの東京外国語大学出版会の硬派の大望です。

実をいうと、駆け出しのわたしたちは、いまのところまだ五点しか世の中に問うていません。出版会のウェブサイトを見ていただくと分かりますが、亀山郁夫『ドストエフスキー　共苦する力』、今福龍太『身体としての書物』、柴田勝二『中上健次と村上春樹』の三点と、日本語教育の指導書『直接法で教える日本語』、それに『よくわかる逐次通訳』という教科書です。

しかし、まもなく、ジリアン・ビアというイギリスの文学者が書いたダーウィニズムの観念の影響作用史を、本学教員である鈴木聡先生の翻訳で送り出します。さらに、それに続く企画を先走って紹介すると、ポーランド出身の著名な言語学者が書いた手引き書『アンナ先生の言語学入門』（仮題）を、本学の言語学者である石井哲士朗先生たちの翻訳で出版したり、まったくあたらしいアジアの作家の作品シリーズを公刊したりする予定が目前です。このアジアの新作家シリーズの第一弾は、タイのポップな感じの小説家プラープダー・ユンの作品『パンダ』で、東南アジア文学の研究者である本学の宇戸清治先生の手で翻訳されます。他にも、従属理論の古典であり、ブラジルの第三四代大統領にもなったフェルナンド・エンリケ・カルドーゾの『ラテンアメリカにおける従属と開発』や、モーリス・アルブヴァックスの古典的な名著『記憶の社会的格子』などの翻訳も着々と進んでいます。さらに、世界中の各都市を社会的記憶のテキストとして解読する書き下ろしのシリーズも準備中です。こんな具合に、出版会のデスクは、世の中に出ようとする企画がひしめき合っているという趣きがあります。

出版会は、大学に入って左側にある白い建物、アゴラ・グローバルの二階にオフィスを構えています。学内の教員、大学院生はもちろん、学生諸君の訪問も大歓迎です。何か本当に新しくて、しかも将来性のある出版企画があるときには、それを抱えて一度訪れてみてください。

（いわさき・みのる　東京外国語大学出版会編集長）

2009年度

出版会活動日誌

二〇〇八年一〇月に学内組織として発足した東京外国語大学出版会は、翌〇九年三月より刊行がはじまりました。船出の（そして怒濤の）一年の主な活動をブログ風にご紹介します。

2009年

3月31日

◎今福龍太先生著『身体としての書物』、柴田勝二先生著『中上健次と村上春樹』発売。出版会・図書館の共同企画による冊子「ピエリア」発行。

いよいよ出版会の本が刊行開始。この三点は、3月20日前後のほぼ同時期に校了。今福・柴田両先生のご尽力には感謝。編集者は著者に育てられることをあらためて悟る。先生方と図書館職員のみなさんの熱意で素敵な読書冊子「ピエリア」ができた。

4月21日

◎亀山郁夫先生著『ドストエフスキー　共苦する力』見本出来。

学長室の広いテーブル上には亀山先生の著書や訳書のゲラが。それを横目に打ち合わせ。当初は3月中の発売を予定していたが、諸事情で刊行が4月にずれ込んでしまった。反省。亀山先生の本が出なければ、本当のスタートとは言えない。22日の出版会発足記念特別シンポジウムに間に合わないと私はクビだ。

4月22日

◎出版会発足記念特別シンポジウム「人文学の危機と出版の未来」を開催。

初夏を思わせる陽気のなか、一五〇人ほどが集まった。パネラーとしてご参加いただいた元岩波書店社長の大塚信一さん、ジュンク堂書店池袋店副店長で外大OGの田口久美子さん、月曜社の小林浩さんからは、それぞれ出版会への励ましと、現在の出版・知的状況にたいする率直なお話をいただく。感謝。シンポ終了後は学内で懇親パーティを開催。

5月9日

◎『身体としての書物』刊行記念トークショー「書物の影（ヴィジョン）に触れる」を青山ブックセンター本店にて開催。

本書の校了時期から準備していたイベント。今福先生のお相手は、詩人の吉増剛造さん。おふたりの独特な対話世界を堪能。当日は吉増さんの映像作品も拝見。その迫力に圧倒された。書店イベントの担当は奇遇にも外大OGの須藤夕香さん。お世話になりました。

5月22日

◎『直接法で教える日本語』発売。

本学留学生日本語教育センターの指導書研究会の先生方による「日本語指導書」を刊行。本書編集委員の藤村知子先生、伊丹千恵先生、藤森弘子先生のほか、出版社の凡人社さんにもお世話になりました。この本、ライバル他社には申し訳ないほど、お買い得です。

7月25日

◎オープンキャンパスで出版会の書籍を販売。

5月16日・6月13日に開かれたオープンアカデミーでの亀山先生の講演会をはじめ、7月18日の保護者会に引き続き、外大生協さんを通じて出版会の本を販売。亀山先生には即席サイン会をしていただきました。学長のサイン本は受験生のお守りです。

8月20日～21日

◎大学出版部協会の夏季セミナーに参加。

姫路で行われたセミナーに、編集長の岩崎稔先生とともに参加。外大出版会は同協会に加盟していないが、協会のみなさんにご配慮をいただきました。他の大学出版部のみなさんとの人的交流と情報交換は貴重な機会。

9月9日～18日

◎初めての「出版実務研修」を開催。

夏休みの二週にわたり、水・木・金の午後に実施（全六回）。応募の学生五名（院生を含む）に、本づくりの基礎、出版業界のしくみ、昨今の出版事情などのレクチャーのほか、吉田ゆり子先生から「江戸時代の出版」、編集者の川崎万里さんから「一冊の本ができるまで」をテーマにお話をいただく。そのほか、出版業界の現場見学を実施。出版社では、集英社とみすず書房にお邪魔した。書店では、ブックファースト新宿店（新宿西口）を見学。そのほか、出版取次会社JRC、竹尾見本帖本店にもお邪魔してお話をうかがった。現場だと学生の目が輝くのが印象的だ。

10月9日

◎『よくわかる逐次通訳』見本出来。

今年の夏はこの本の編集で明け暮れた。プロの通訳者である先生方による教本なので、書名のとおりじつにわかりやすく、さらに付録DVDに収録されたノートテーキングのデモは圧巻です。一般書店での発売は13日からだが、11日に外大で開催の「通訳サミット」でひと足先に生協さんを通じて特別販売。

12月10日～

◎二回目の「出版実務研修」を実施。

夏休みの「出版実務研修」が好評で、12月から翌年1月にかけての毎週木曜の午後に実施（全六回）。十名もの応募があったが、授業や就活の都合で受講者は結果的に五名に。初回と同様、出版の基礎知識や出版事情のレクチャーのほか、編集長の岩崎稔先生、副編集長の吉田ゆり子先生にお話をいただく。また、ゲストレクチャーとして、元書店員で編集者の柳瀬徹さんにお話をいただいた。見学では、出版社の白水社、書店の紀伊國屋書店新宿本店（人文書フロア）を訪問し、貴重なお話をうかがった。

2010年

1月25日

◎AA研の雑誌『Field ＋』第3号を発売開始。

昨年一月に創刊されたアジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）の雑誌『Field＋』（年二回刊）が、第3号から出版会を通じて販売開始。写真や図版が豊富なオールカラー。この雑誌を読むと、その現地に行ってみたくなるのは私だけではないはず。

3月5日

◎『Field＋』販売開始記念イベントを開催。

東京・神田神保町の喫茶店「サロンド冨山房フォリオ」で、同誌第3号の寄稿者である菊地滋夫先生（明星大学）と錦田愛子先生（早稲田大学）に、それぞれケニアとパレスチナというフィールドのお話をいただく。三十余名が来場。たくさんの写真や映像を駆使してのお話に感銘。なおさら現地に行ってみたくなる。こうした機会を継続的に設けることができればいいなあ。

3月、出版会の立ち上げに多大なご尽力をいただいたドイツ文学者の谷川道子先生が退官。また、事務面で出版会を支えていただいた附属図書館の木村晴茂課長と大澤正男専門員が異動。たいへんお世話になりました。すっかり寂しくなるが、課題を乗り越え、地道に粘り強く活動を続けるしかない。

3月はまた、本誌「ピエリア」の編集作業の佳境を迎える。今年は出版実務研修を受講した学生さんらの協力を得て、質量ともに前回をしのぐ冊子になりそう。たまっている他の企画のゲラや原稿を進めなくちゃ。厳しい出版状況のなか、わが出版会の本領発揮はこれからだ。本格始動二年目に乞うご期待！

（出版会・竹中）

世界を感応しよう！

雑誌『Field＋（フィールドプラス）』が伝えたいこと

星　泉
（『Field＋』編集長）

私たちは今、変化のスピードがとても早い時代に生きています。気づかないうちにあっという間に押し流されたり、取り残されたりして、その意味を考える暇もなかったりします。こういう時代を真っ当に生きて行くには、一人一人が自分のアンテナを持ち、頭と身体を全部使って知恵を働かせ、よりタフに行動するしかありません。

タフに生きるにはどうしたら？ そう思ったら世界を見渡してみましょう。世界中のさまざまな境遇にある人々が、人と人とのつながりを大切にしながら、伸びやかに、したたかに、いきいきと困難を乗り越えています。そんな知恵のある先達の生き方やことばに触れることは驚きと喜びに満ちた体験です。若いみなさんには「行ってみよう、見てみよう」の精神で、ぜひ世界に飛び出してほしいと思います。

そんなみなさんのためのガイドとしてご紹介したいのが、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の雑誌『Field＋』です。

私たちの研究所は、世界各地のフィールドにおもむいて研究するさまざまな分野の研究者と幅広いネットワークを持っています。このネットワークの中には、世界のさまざまなことばや暮らしの姿を、独自の視点で観察、研究している魅力的な研究者がたくさんいます。こうした専門の研究者はふところが深くて、何を聞いても面白い。この面白さを多くの方に伝えたい。そう願った私たちは、雑誌を作ろうと思い立ちました。

実際に雑誌作りを始めてみると、私たちの期待以上に刺激的な記事がどんどん集まってきました。編集部もわくわくどきどきの連続です。執筆陣の専門は、人類学、歴史学、言語学、霊長類学、雪氷学、民族植物学、古文書学、計量文献学、動物音響学、民族音楽学など、多岐にわたります。自らがおもむいた場で、見る、聞く、話す、感じるといった五感を駆使したフィールドワーク。そこから得られた何にも代え難い経験が文章や写真を通じて迫力をもって伝わってきます。

読めば「人間は、この世界は面白い！」と思わず唸ること請け合いのこの雑誌、ぜひ一度手に取って、多様な価値観の中で生きる人々の暮らしの一端をのぞいてみてください。そしてみなさんもぜひ、フィールドワークの楽しみを味わうために、世界に飛び出してみてください。

（ほし・いずみ　アジア・アフリカ言語文化研究所准教授）

FIELD＋

◎ Field＋とは？

異なる土地、環境に自らをおいて、観察など、さまざまな工夫をして学ぶこと。それがフィールドワークなら、私たちが日本で暮らしている毎日もまた、大きな意味でフィールドワークだと言えます。日常生活のなかで、つねに私たちは何かを見ています。それをどう見るのか。本誌が提供する世界中からの情報や視点が、あなたの暮らしというフィールドに何かプラスをもたらすスパイスのようなものになればと願って名付けました。

◎こんな方におすすめ！

- 世界のさまざまな地域の人びとの生き方や考え方を知りたい
- 社会科の授業やゼミの教材を探している
- 外国のお客様と話をするときに使えるような気の利いた話題がほしい
- 他の分野の研究者がフィールドで何をしているのか知りたい

【既刊号のご案内】

▶ no.1（2009年1月刊行）
巻頭特集　「シングル」で生きる
フィールドワークって何？「知る」

▶ no.2（2009年7月刊行）
巻頭特集　フュージョンする中国系移民
フィールドワークって何？「食べる」

▶ no.3（2010年1月刊行）
巻頭特集　ムスリムの生活世界とその変容
フィールドワークって何？「聞く」

【次号の予告】

▶ no.4（2010年7月刊行予定）
巻頭特集　東南アジアのイスラーム
フィールドワークって何？「見る」

【入手方法】

東京外国語大学出版会を通じて市販しています（税込500円）。
お求めは、お近くの書店にお申し込みください。

【お問い合わせ】

http://www.aa.tufs.ac.jp/field-plus/
E-mail: field-plus@aa.tufs.ac.jp

ハッチポッチへようこそ！

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。これから大学生活を送るにあたり、勉学・サークルなどさまざまな事柄の出会いを通じて知識だけではない、価値ある経験を積まれていくと思います。

外語大生協では、パソコン・文具など勉学用品や教科書だけではなく、さまざまな大学生活のバックアップをしています。そんな生協から、ほんの一部のご紹介ですが、「読書」を応援する取り組みをご紹介いたします。

店長　佐藤晋輔

読書マラソン

みなさんは、「読書マラソン」というものをご存じでしょうか？
読書マラソンとは、本を継続的に読んで、4年間で100冊以上を目指そうという企画です。
では、何のために読書をするのか？

① 読書は自分を作る。自己形成にとって強力な道だから。
② 読書は自分を広げ、コミュニケーション力がアップするから。
③ 読書は楽しい。あらゆる時代、世界の人と対話ができる。

ハッチポッチでは、このような理念に基づき、この企画「読書マラソン」に取り組んでいます。

そして、多くの人にその輪を広げるために、読まれた本のコメントカード（紹介カード）を書いてもらい、店頭にて、その本を紹介していただいております。コメントカードを10冊分書いていただくごとに、ご褒美として300円分の生協利用券を差し上げています。

また例年、朝日新聞の協力のもと「読書マラソン　コメント大賞」を開催しています。全国の大学生が書いたコメントからNo.1を決めるイベントです（2009年度は、東外大生が銅賞を受賞しました！）。

さらに、2009年度より「東京外国語大学　コメント大賞」を開催しました。もちろん、「学長賞」「図書館長賞」など学長先生らのご協力をいただき、表彰式も行いました（その様子は東外大生協のホームページをご覧ください）。多くに人に本を読んで楽しんでいただきたい！　そんな思いが詰まった「ハッチポッチ」へ是非ご来店ください。

外大生はどんな本を読んでいるの？

ハッチポッチの書籍売上ランキング・ベスト3をご紹介！（2009年1月～12月までのランキング。教科書は除く）

文学小説

① ドストエフスキー　共苦する力	東京外国語大学出版会	著者　亀山郁夫
② 罪と罰　1	光文社	著者　ドストエフスキー／訳　亀山郁夫
③ 1Q84　BOOK 1	新潮社	著者　村上春樹

【『ドストエフスキー　共苦する力』内容紹介】　そこに人間の精神のすべてが書かれている――。『罪と罰』『白痴』『悪霊』『カラマーゾフの兄弟』のドストエフスキー四大長編の深奥に分け入り、そこに隠された秘密のメッセージを多様に読み解きながら、神なき時代に生きる現代人の救いのありかをさぐる。

芸術諸芸娯楽

① 知的複眼思考法	講談社	著者　苅谷剛彦
②【ひとり時間】のススメ	中経出版	著者　中山庸子
③ 名画を見る眼	岩波書店	著者　高階秀爾

【『知的複眼思考法』内容紹介】　常識にとらわれた単眼思考を行っていては、いつまでたっても「自分の頭で考える」ことはできない。自分自身の視点からものごとを多角的に捉えて考え抜く―それが知的複眼思考法だ。情報を正確に読みとる力。ものごとの筋道を追う力。受け取った情報をもとに自分の論理をきちんと組み立てられる力。こうした基本的な考える力を基礎にしてこそ、自分の頭で考えていくことができる。全国3万人の大学生が選んだ日本のベストティーチャーによる思考法の真髄。

社会教育ほか

① 就活のバカヤロー	光文社	著者　石渡嶺司・大沢仁
② 武装解除	講談社	著者　伊勢崎賢治
③ 悩む力	集英社	著者　姜尚中

【『就活のバカヤロー』内容紹介】　企業も学生も大学も、三者三様に不満を抱えながら行っているのが就活という「茶番劇」。その実態、それぞれの本音とは。企業、大学、学生たちの悲喜こもごもな舞台裏を、現場からのリアルな情報満載で描く。

哲学心理倫理

① 思考の整理学	筑摩書房	著者　外山滋比古
② 今こそアートレントを読み直す	講談社	著者　仲正昌樹
③ 知的創造のヒント	筑摩書房	著者　外山滋比古

【『思考の整理学』内容紹介】　アイディアが軽やかに離陸し、思考がのびのびと大空を駆けるには？　自らの体験に則し、独自の思考のエッセンスを明快に開陳する、恰好の入門書。

歴史

① 英語の歴史	中央公論新社	著者　寺澤盾
② 21世紀家族へ	有斐閣	著者　落合恵美子
③ 世界のイスラムジョーク集	中央公論新社	著者　早坂隆

【『英語の歴史』内容紹介】　5世紀半ば、ブリテン島の一部でのみ使われていた英語は、現在、15億人が使う国際言語へと成長した。本書は、現代英語を意識しながら1500年の歴史を概観し、近年英米社会で急変する姿とその未来を描く。

総記年鑑雑誌情報科学

① 朝日キーワード2009→2010	朝日新聞出版	
② レポート・論文の書き方入門	慶応義塾大学出版会	著者　河野哲也
③ TOEIC TEST　英単語スピードマスター	Jリサーチ出版	著者　成重寿

【『朝日キーワード2009→2010』内容紹介】　現代社会を知るために必須のキーワードを厳選し、朝日新聞の記者がニュースのツボをわかりやすく解説。手軽に読めて役に立つ、就職試験、入試小論文、資格試験対策の決定版。特集は「麻生政権発足とねじれ国会」ほか。

ランキングの傾向を見ると、やはり「考える力や整理する力」「論文・レポート作成」などに悩んでいるのかな？　と推測できます。文学・小説部門を見ると、亀山学長先生の本（東京外国語大学出版会刊！）が村上春樹をおさえています。外語大らしい結果かと思います。

実は今回のベスト3だけでも、亀山学長先生や伊勢崎先生など本学の先生がランキングされていますが、東京外国語大学の先生方の著書・翻訳書は数多く、ベスト10までランキングに入れるとかなりの本がヒットします。今回ランキングから外した語学系（教科書になる本が多いため）にいたっては多くの先生が出版されています。さすが、語学スペシャリストの大学！

みなさんも自分自身の創造力や考える力を磨き、語学のスペシャリストとして将来ベストセラー作家を目指すのも面白いかもしれませんね(その時は、ハッチポッチでサイン会を開かせてくださいね)。

東京外国語大学生活協同組合　購買書籍部ハッチポッチ
TEL042-354-3062　URL http://tufscoop.jp/

外語大の先生の新刊棚

この一年間（二〇〇九年四月～二〇一〇年三月）に出版された外語大の先生の著書・訳書のなかから主なものを紹介します。（先生のお名前の五十音順）

※書名／著編者名（訳者名）／出版社名／刊行年月／税込価格　（編集部）

◆新井政美先生

『オスマン帝国はなぜ崩壊したのか』

新井政美著　青土社　二〇〇九年六月　二五二〇円

オスマン帝国の官僚としての矜持と西洋的「進歩」とのあいだで、イスラム国家と国民国家を両立させようとした熱きオスマン・エリートたちを物語る。

◆荒川洋平先生

『日本語という外国語』

荒川洋平著　講談社現代新書　二〇〇九年八月　七七七円

留学生への豊富な日本語教育経験から語られる日本人のための日本語再入門。

◆石川博樹先生

『ソロモン朝エチオピア王国の興亡―オロモ進出後の王国史の再検討』 山川歴史モノグラフ19

石川博樹著　山川出版社　二〇〇九年一一月　五二五〇円

エチオピア王国史の空白を埋めつつ、君主に古代イスラエル王国の王の末裔であることを求める観念が、エチオピア史に与えた影響を考察する。

◆伊勢崎賢治先生

『さよなら紛争―武装解除人が見た世界の現実 14歳の世渡り術』

伊勢崎賢治著　河出書房新社　二〇〇九年四月　一二六〇円

「平和」をもっと広告しなければ戦争は終わらない。泥沼化した現場で紛争解決を指揮してきた著者による新しい平和構築の方法。その他二〇〇九年一二月には『**伊勢崎賢治の平和構築ゼミ**』（大月書店）、二〇一〇年二月には『**アフガン戦争を憲法9条と非武装自衛隊で終わらせる**』（かもがわ出版）を出版。

◆市川雅教先生

『因子分析』 シリーズ行動計量の科学7

市川雅教著　朝倉書店　二〇一〇年一月　三〇四五円

因子分析の理論と方法を明快に説明するテキスト。正規分布を仮定した古典的ともいうべき方法を中心に、統計的推測を重視し因子分析を解説する。

◆今福龍太先生

『ブラジルから遠く離れて　1935-2000―クロード・レヴィ＝ストロースのかたわらで』

今福龍太＋サウダージ・ブックス編著　サウダージ・ブックス発行／港の人発売　二〇〇九年五月　二一〇〇円

レヴィ＝ストロースの名著『悲しき熱帯』や南米サンパウロで撮影された写真作品を精緻に読み解きつつ、彼の思想にとって「ブラジル」という場がどのような意味をもっていたかを再考する。

◆岩崎稔先生

『アガンベン入門』

エファ・ゴイレン著　岩崎稔・大澤俊朗訳　岩波書店　二〇一〇年一月　三五七〇円

わが出版会編集長渾身の翻訳。現代イタリアの思想家アガンベンの初期から現在にいたる知的営為の全貌を包括的に解説する。その他二〇〇九年四月には『**21世紀を生き抜くためのブックガイド―新自由主義とナショナリズムに抗して**』（河出書房新社）、二〇〇九年の五月と九月には『**戦後日本スタディーズ**』シリーズ（紀伊國屋書店出版部）を編み、二〇一〇年三月にはヴォルフガング・エングラー『**東ドイツのひとびと―失われた国の地誌学**』（未来社）を山本裕子先生とともに翻訳出版。

◆宇戸清治先生

『二つの時計の謎』 アジア本格リーグ2

チャッタワーラック著　宇戸清治訳　島田荘司選　講談社　二〇〇九年九月　一七八五円

一九三二年、立憲革命直後のバンコクを舞台に〝タイのシャーロック・ホームズ〟サマイ警部と相棒ラオーの活躍を本格的なミステリーとして描く。

◆太田信宏先生

『接続された歴史―インドとヨーロッパ』

サンジャイ・スブラフマニヤム著　三田昌彦・太田信宏訳　名古屋大学出版会　二〇〇九年六月　五八八〇円

これまでのオリエンタリズム論や構造論的アプローチを批判し、「接続」による新たな世界史像を切りひらく。

◆小笠原欣幸先生

『資本主義の妖怪―金融危機と景気後退の政治学』

アンドルー・ギャンブル著　小笠原欣幸訳　みすず書房　二〇〇九年一二月　二九四〇円

バブルを繰り返し世界を脅かす資本主義の妖怪とは何か。イギリス政治学の泰斗が歴史・思想・国際関係から金融危機の全容を解明する。

◆金井光太朗先生　佐々木孝弘先生

『アメリカの愛国心とアイデンティティ―自由の国の記憶・ジェンダー・人種』

金井光太朗編著　彩流社　二〇〇九年一〇月　二九四〇円

アメリカ合衆国が国家建設以来どのような公共イメージを掲げ争っていたかを、歴史記憶の問題を通じて迫る。

◆亀山郁夫先生

『甦るフレーブニコフ』

亀山郁夫著　平凡社ライブラリー　二〇〇九年四月　一九九五円

「二〇世紀最大の詩人」とも称されたフレーブニコフ。本書は、亀山学長の最初の単著で二一年前に晶文社より刊行されたフレーブニコフに関する世界初のモノグラフ。その他二〇〇九年五月には『**「罪と罰」ノート**』（平凡社新書）、『**終末と革命のロシア・ルネサンス**』（岩波現代文庫）、同七月には『**罪と罰**』（光文社古典新訳文庫）最終巻を翻訳出版。

◆河合香吏先生

『集団―人類社会の進化』

河合香吏編著　京都大学学術出版会　二〇〇九年一二月　四二〇〇円

ヒトはなぜ「集まる」のか。集団形成における暴力と誘惑の役割、集団形成のメカニズムを、サルからヒトへの進化のなかで解きあかす。

◆倉石一郎先生

『包摂と排除の教育学―戦後日本社会とマイノリティへの視座』

倉石一郎著　生活書院　二〇〇九年一一月　三三六〇円

戦後の学歴社会的価値体系と、かつてマイノリティの生活世界に息づいていた「排除」を相対化し、歴史的眺望を欠いているかのような現状の研究に一石を投じる。

◆酒井啓子先生

『イラクで私は泣いて笑う―NGOとして、ひとりの人間として』 JVCブックレット

酒井啓子編著　めこん　二〇〇九年六月　九六六円

援助するとはどういうことか。天下国家の発想から離れたNGOの人々の活動を通じて、イラク戦争後のイラク人社会の現実を映しだす。

◆佐藤公彦先生

『歴史学と社会理論（第二版）』

ピーター・バーク著　佐藤公彦訳　慶應義塾大学出版会　二〇〇九年六月　六〇九〇円

社会理論だけでなくポストモダニズムなどの現代思想の影響も紹介しつつ、現代歴史学を横断的に網羅する。

◆椎野若菜先生

『セックスの人類学』シリーズ来たるべき人類学1

奥野克巳・竹ノ下祐二・椎野若菜共編　春風社　二〇〇九年四月　二〇〇〇円

イルカやサルの性生活から、セックス儀礼、SM、性転換、ペニスピンまで、フィールドワークを通じて動物と人間の性を論ずる。

◆新谷忠彦先生

『タイ文化圏の中のラオス—物質文化・言語・民族』

新谷忠彦／クリスティアン・ダニエルズ編　慶友社　二〇〇九年一〇月　六〇九〇円

かつてゆるやかに統合されていた「タイ文化圏」の一区域ラオス北部を対象に、言語と民族、農具と農耕技術、鉄器文化などについて考察する。

◆陶安あんど先生

『秦漢刑罰体系の研究』

陶安あんど著　創文社　二〇〇九年四月　一二六〇〇円

秦律固有の刑罰体系や新しい刑罰の創設を文帝の刑制改革という狭い枠組みから開放し、秦漢刑罰体系の変遷についての新たな鳥瞰図を描く。

◆立石博高先生　篠原琢先生

『国民国家と市民—包摂と排除の諸相』

立石博高・篠原琢編　山川出版社　二〇〇九年六月　四二〇〇円

マイノリティの同化と、錯綜する多様なエスニシティ。グローバリゼーションの時代にもトランスナショナルへと昇華しえない国民国家の課題に迫る。

◆千葉敏之先生

『中世の都市—史料の魅力、日本とヨーロッパ』

高橋慎一朗・千葉敏之編　東京大学出版会　二〇〇九年五月　三三六〇円

都市図や巡礼案内など個性豊かな史料から、中世日本・西洋の都市空間と社会を鮮やかに活写する。

◆鶴田知佳子先生

『オバマ流世界一のスピーチの創りかた—45分でわかる！』

鶴田知佳子著　マガジンハウス　二〇〇九年五月　八〇〇円

聞き惚れ、説得され、記憶に残るといわれるオバマ米大統領のスピーチを放送同時通訳の第一人者が分析し、そのスピーチに迫る。

◆豊島正之先生

『活字印刷の文化史—きりしたん版・古活字版から新常用漢字表まで』

豊島正之・張秀民・小宮山博史ほか著　勉誠出版　二〇〇九年五月　一〇二九〇円

室町期末から現代までの印刷史研究の成果。活字印刷文化の新しい視軸を提起し、その歴史を再編する。

◆中山智香子先生

『経済戦争の理論—大戦間期ウィーンとゲーム理論』

中山智香子著　勁草書房　二〇一〇年二月　三三六〇円

新自由主義の概念が生まれた大戦間期の時代的文脈を整理し、経済と戦争の分かち難い結びつきについて考察する。

◆西谷修先生

『理性の探求』

西谷修著　岩波書店　二〇〇九年一〇月　二五二〇円

九・一一以後に思想を語ることは無益なのか。人として在ることへの問いを、混沌とした思想の風景から収集する。

◆前田和泉先生

『通訳ダニエル・シュタイン』上・下

リュドミラ・ウリツカヤ著　前田和泉訳　新潮クレストブックス　二〇〇九年八・九月　上・二一〇〇円／下・二三一〇円

ゲシュタポでドイツ軍の通訳をし、ユダヤ人脱走計画を成功させた実在のカトリック神父の激烈な生涯を描いた長編小説。ボリシャヤ・クニーガ賞、アレクサンドル・メーニ賞の受賞作。

◆町田和彦先生

『図説　世界の文字とことば』

町田和彦編　河出書房新社　二〇〇九年一二月　一八九〇円

世界の中から四五の言語をとりあげ、優美な文字、かわいらしい文字、不思議な文字などさまざまな文字と、それを書き話す人々の世界を紹介する。

◆村尾誠一先生

『中世和歌史論—新古今和歌集以後』

村尾誠一著　青簡舎　二〇〇九年一一月　一二六〇〇円

文学史的な展開の中で、中世和歌とはいったい何か。後鳥羽院から正徹までの歌人をとりあげ、作品や事象に即したかたちで具体的に論じる。

◆米谷匡史先生

『谷川雁セレクションⅠ　工作者の論理と背理』

『谷川雁セレクションⅡ　原点の幻視者』

谷川雁著　岩崎稔・米谷匡史編　日本経済評論社　二〇〇九年五月　各三三六〇円

岩崎稔先生との共編著。『セレクションⅠ』では、左翼運動のさなか自ら「工作者」として民衆のサークル運動に力を注ぎ、思想の「自立」に賭けた革命詩人谷川雁の軌跡をたどり、『セレクションⅡ』では、筑豊の炭坑労働者、子どもたちの「人体交響劇」、宮沢賢治など無限に広がる谷川雁の思考空間を探索する。

◆李孝徳先生

『人種主義の歴史』

ジョージ・M・フレドリクソン著　李孝徳訳　みすず書房　二〇〇九年一二月　三五七〇円

反ユダヤ主義、奴隷制、アパルトヘイトなど人間の差異を強調し、差別を合理化する人種主義の原像と全体を明らかにする。

◆東京外国語大学留学生日本語教育センター

『初級日本語　新装改訂版』上

東京外国語大学留学生日本語教育センター編著　凡人社　二〇一〇年三月　二九四〇円

本書は『初級日本語』（一九九〇年刊）に、新たに「きくれんしゅう」を加えて再編成したもので、イラストが大幅に追加され、CD付きになりより使いやすくなっている。その他二〇一〇年一月には『実力日本語　単語・文法解説書（中国語版）』下（凡人社）を出版。